

こんにちは、嘱託員の鈴木です。

先日、青森県立郷土館「新収蔵×再発見 2018」(5月25日～7月1日)に行ってきました。この企画展は、近年新たに収蔵された資料、これまで公開される機会が少なかった資料に加えて、昨年度の収蔵庫大規模改修の際に再発見されたものも展示されています。

そこで、展示資料の中に「お！」と思ったものがありました。それは青森博物学会創立満50年を記念する絵はがきの1葉で、ツガルフジという植物の絵が添えられた西洋人の写真には「フォーリー氏肖像」と書かれています。

「フォーリー氏」とは、明治時代に青森県に滞在したカトリックの宣教師にして植物採集家のウルバン・ジャン・フォーリー神父のことです。

フォーリーは1847年にフランスに生まれ、明治6年(1873)に26歳で来日、東京、新潟、盛岡などで布教活動を行った後、明治15年に北海道・千島・青森県の巡回宣教師に任命されました。青森県では、まず弘前で、さらに青森・三本木(現十和田市)、黒石、八戸と伝道を試み、明治34年には青森市浜町に天主公教会(現本町4丁目の本町カトリック教会)を建設しました。また、カトリックの信仰だけでなく、りんごの剪定技術や果樹・西洋野菜の栽培の指導も行っています。



浜町の天主公教会
(昭和20～30年代)

一方、フォーリーは日本や東アジアの植物を海外に紹介したことで知られています。彼は宣教師としての仕事の傍ら野山に分け入り、さまざまな植物を採集し^{さくよう}腊葉(押し葉)標本にして欧米の博物館や植物学者に送り、その代金で教会の設備などを整えました。採集場所はエトロフ島、礼文島から奄美大島と日本全域のみならず樺太、朝鮮半島、ハワイ、台湾と広範囲におよび、送られた標本から新種と認められた植物の多くにFaurie(フォーリー)の名が冠されました。

先の絵はがきに描かれたツガルフジ(和名)も彼が西目屋村で採集した新種で、学名を *Vicia Fauriae* Franch といい、この絵はがきの解説が書かれた別の 1 葉には「本県ト同氏トヲ連想セシムル好記念品タリ」とあります。

その後、大正 2 年(1913)に司教職を免じられますが、すぐには帰国せず 66 歳で台湾に渡り、同 4 年に採集に行った山の中で鼻腔内にヒルに入られたことから体調を崩し、同地で亡くなりました。

彼の訃報が届くと青森市でも弔祭式が行われ、教会関係者や信者のほか政治家、教育者、文化人らが参列、弔辞を工藤卓爾青森市長が読んでいます。



フォリーの胸像(戦前 台北植物園)

やがて同 6 年、交流のあった植物学者や日本植物学会有志により、台湾の台北植物園にフォリーの胸像が建立されました。その後、戦争末期に金属供出で失われましたが、平成 29 年(2017)に植物園内の植物標本館「^{さくようかん}腊葉館」の復旧とともに復元されました。また、日本に残された膨大な植物標本は現在京都大学が所蔵し、今も世界の研究者たちに活用されています。

※今回のトリビアは「偉大な植物採集家ウルベン・フォリー神父」(1970 年 佐藤圭一郎)を参考にしました。